

## 旧約聖書の聖霊

「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、年寄りも夢を見、若い男は幻を見る。その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。」(ヨエル書2:28-29)

聖霊は永遠の「三位一体」(三つが一つ)の神の三位格の一つである(→「聖霊の教理」の項 p.1970)。一人のまことの神は単一の存在であって(申6:4, イザ45:21, 1コリ8:5-6, エペ4:6, 1テモ2:5)、父と子と聖霊(マタ28:19, マコ1:9-11, Ⅱコリ13:13, 1ペテ1:2)という三つの別個であるけれども互に関係のある完全に統一された人格の中にご自分を現された。それぞれの位格は完全な神であり、ほかの位格と平等であり、神の属性を全部持っておられる。けれども三人の神ではなく、一人の神である(→マタ3:17注, マコ1:11注)。この考えを別の方法で説明すると神は「人格では三人、本質では一つ」ということである。これを神は単に歴史の中で時代ごとに三つの「様式」や表示の仕方でご自分を現されたと誤解しないようにしなければならない。たとえば神は旧約聖書では父、新約聖書では主イエス、現在は聖霊として現されているということではない。過去の歴史ではこのような間違った教えが教会を分裂させてきた。正しい教理またはこのことの正しい理解は神の三位が全部同時に区別を持って存在しておられるとすることである。神は一人であるけれども三つの別個の互に関係のある統一された人格という考えは神学用語で「三位一体」と言われる。この「三つが一つ」>三位一体という考えに相当するもの、等しいものは人間世界にはないけれども、これは完全に聖書的であって、神の複雑な特性を正しく理解する上でなくてはならないものである。(A8:11土) > (A8:8土)

聖霊の完全な力と目的は主イエスの働きまで(→「イエスと聖霊」の項 p.1809)、そして後の五旬節(→使2:)のときまでは啓示されなかったけれども、聖霊とその働きを指すことばは旧約聖書にもある。ここでは聖霊についての旧約聖書の教えを調べる。> (A8:11土) > (A8:8土)

「霊」ということばは、ヘブライ語で「ルアハ」であり、時には「風」または「息」と訳されている。それは旧約聖書で「神の息」または「神からの風」というときには(創2:7, エゼ37:9-10, 14)は神の御霊の働きを指しているということである。> (A8:11土) > (A8:8土)

## 旧約聖書の中の聖霊の働き

聖書は旧約聖書の時代の聖霊の種々の働きを描写している。

(1) 聖霊は天地創造で積極的な役割を果たされた。最初の書物である創世記の二番目の節は「神の霊が水の上を動いていた」(創1:2)と言い、神の創造的ことばが世界をかたちづくり、地からいのちを生み出すための備えを聖霊がしておられたと言っている。神のことば(三位一体の第二格である主イエスは永遠のことばとされているヨハ1:1-14)と神の御霊はともに天地創造では積極的に活動された(→ヨブ26:13, 詩33:6, →「天地創造」の項 p.29)。そこで御霊はいのちの創始者とも考えられる。神がアダムを創造されたとき、神から「いのちの息」を吹き込まれたけれどもそれは明らかに神の御霊だった(創2:7, →ヨブ27:3)。そして聖霊は神の被造物にいのちを与えることにかかわり続けておられる(ヨブ33:4, 詩104:30)。

(2) 御霊は神のメッセージをご自分の民に伝えるのに積極的だった。たとえば荒野でイスラエル人を教えたのは御霊だった(ネヘ9:20)。イスラエルの詩篇の作者(詩の作者、賛美の歌人)が歌を歌って奉仕をしたときには、主の御霊の感動(動かされ、導かれ、力を受けること)を受けて行った(Ⅱサム23:2, →使1:16, 20)。同じように神の御霊は預言者たちに感動を与え神のことばを大胆に宣言させ、みことばを人々に伝えさせた(民11:29, Ⅰサム10:5-6, 10, Ⅱ歴20:14, 24:19-20, ネヘ9:30, イザ61:1-3, ミカ3:8, ゼカ7:12, →Ⅰペテ

1:20-21)。エゼキエルによるとにせ預言者を見分けるかぎの一つは、神の御霊ではなく「自分の霊に従」っているかどうかである(エゼ13:2-3)。けれども神の御霊には、神と正しい関係を持っていない人の上に「臨ん」で(その人を通して影響を与え、神の目的のために用いる)、神の民についてメッセージを伝えさせることも可能だった(→民24:2注)。

(3) 旧約聖書の神の民の指導者たちは主の御霊によって活力を与えられていた。たとえばモーセの霊は神の御霊との一致を体験し、神が感じられる悲しみと不満を感じた。神が苦しむときに苦しみ、神が怒るときに罪に対して怒った(→出33:11注、→出32:19)。モーセがイスラエル人を指導するのを補助してもらうために70人の長老(尊敬され感化力のある指導者、役員)を選んだとき、神はモーセの上にあった「霊のいくらかを取って」長老たちの上に置かれた(民11:16-17、→民11:12注)。別の例として、ヨシュアがイスラエルの指導者としてモーセのあとを継ぐように任命されたとき、神は「神の霊」(聖霊)がヨシュアの中にあることを確約された(民27:18注)。同じ御霊はギデオン(士6:34)、ダビデ(1サム16:13)、ゼルバベル(ゼカ4:6)の上に臨まれた。旧約聖書では指導者に必要とされた最大の資格は、神の御霊の臨在だったことが明らかである。

(4) 神の御霊は特別な働きや奉仕を十分に行えるように、個人の上にも臨まれた(力づける、影響を与える、通して働く)。有名な旧約聖書の例はヨセフである。ヨセフはパロの宮廷で効果的な奉仕ができるように「神の霊の宿っている」人と認められた(創41:38)。また幕屋の建設のために必要な美術的な仕事をするため、そしてほかの人々に作業を教えるために、神が神の御霊で満たしたベツアルエルとオホリアブという才能のある二人の職人のことを考えるとよい(→出31:1-11, 35:30-35、→「幕屋」の図 p.174, 「幕屋の備品」の図 p.174)。ここまでに挙げた例では、「神の霊に満たされる」ということは新約聖書の「聖霊のバプテスマ」と全く同じではない(→「聖霊のバプテスマ」の項 p.1950)。旧約聖書では聖霊は神が特別な奉仕のために選ばれた少数の人々の上にだけ臨んで力を与えられた(→出31:3注)。主の御霊はオテニエル(士3:9-10)、ギデオン(士6:34)、エフタ(士11:29)、サムソン(士14:5-6, 15:14-16)など多くの士師たちの上に臨まれた。これらの例は神が大きく力強く用いるために選ばれた人々には主の御霊が臨むという神の不変の原則を示している。御霊がこの人々に力を与えられたのである。

(5) 旧約聖書で神に忠実な人々の中には、御霊が義の道(神の基準に合った正しい生活をし、神との正しい関係を保つこと)に人々を導きたいと願っておられることに気付いている人々がいた。ダビデはこのことを詩篇の中で言っている(詩51:10-13, 143:10)。神の民が神に耳を傾けないで自分勝手な道を歩んだことは、実際には御霊の導きに背いたことである(→創16:2注)。神の御霊に応答しゆだねることができなかつた人々は必ず何かのかたちで神のさばきを体験した(→民14:29注, 申1:26注)。

(6) 旧約聖書の時代に聖霊はごく少数の人々にだけ臨み、満たし、奉仕や神のメッセンジャーとして話す力を与えられた。聖霊が一般に広く注がれることはなかつた(→ヨエ2:28-29, 使2:4, 16-18)。御霊のさらに広範囲にわたる働きと傾注(力を与えること)は五旬節の大いなる日までは始まらなかつた(→使2:)

### 御霊の完全な力の約束

旧約聖書は未来の御霊の時代(新約聖書の時代、教会時代)を絶えず待望んでいた。それは主イエスが聖霊を送り、弟子たちに力を与えて世界中で使命を達成させてくださる時代である。

(1) 預言者たちはやがて来られるメシヤ(「油そそがれた者」、救い主、キリスト)の生涯の中で御霊が果たす役割について何度も預言した。イザヤはやがて来る王、「主のしもべ」は神の御霊が特別なかたちで宿る人として描いている(→イザ11:1-2, 42:1, 61:1-3)。主イエスはナザレの会堂でイザヤ書 61章を朗読したとき「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました」(ルカ 4:21)と言ってそれをご自分に当てはめられた。

(2) 旧約聖書の別の預言は聖霊の一般的傾注、つまり神が神の民ひとりひとりの上に聖霊を豊かに注がれるときが来ることを指し示している。たとえばイザヤは御霊が人々に臨んで離れない、そしてその子孫とさえともおられると預言した(イザ59:20-21)。この継続的体験を示す重要な旧約聖書のことばはヨエル書2章28-29節でペテロが五旬節の日に引用したものである(使2:17-18)。同じメッセージはイザヤ書 32章

